

戦争のできる国の中で

～光州交流会を終えて～

藤田

「戦争法案」と呼ばれる法案に反対する人々が、「民主主義って何だ」「何だ」という SEALDs の学生の声に合わせて、声を挙げた。国会前や全国各地で多くの人がデモに参加した2015年の夏、私たちは第21回の交流会を光州で行った。

「5・18」は、韓国の人々にとって、「重い」という言葉だけでは言い尽くせない記憶である。1980年全斗煥らのクーデターと金大中らの逮捕を契機に、5月18日に起きた学生のデモは、戒厳軍の激しい弾圧にあった。学生に対する暴行に怒った市民も立ち上がり、デモ参加者は20万人にまで増え、一時光州は自治解放区となったが、先鋭軍によって5月27日鎮圧された。死者240名、行方不明約400名、負傷者訳5,000名と言われている。金泳三、金大中、盧武鉉の時代になって、光州を民主化の「聖地」としてとらえなおすようになり、墓地などが整備された。

このような光州で交流会を行うにあたり、期待と同時に、緊張する気持ちをもたされた。その理由の一つには、民主化運動で亡くなった方を光州の人々がどのように記憶しているのかということであった。日本では戦争の時代、死者は靖国神社で「英霊」となり、新しい死者を生み出すために利用された。光州では、5・18をどのように記憶しているのか。

今回の交流会で、光州の人々は、あの日、自分がどこにいたのか、どのように記憶しているのか、そこから何を学んだのかを一人ひとりが誠実に語っていた。「私はあのとき、親に勧められて逃げた。」「私には、借りがある。」と語った主題講演のチェジョンギ全南大学教授は、「私たちは、あの出来事を『事件』とは呼ばない。『5・18民主化運動』と呼ぶとして、5・18をこれから

目次

戦争のできる国の中で	1
交流会感想	4
交流会アンケートより	7
みんな大切なわたしたちの子どもです	14
神様のひとりごと	15
短信	16

の時代の中で位置づけた。お墓を案内して下さった方は、「記憶することが大切だ。」と繰り返し語った。ウジヨンさんが授業でとりあげた絵本には、銃が好きだった少年が、5・18以後、銃を嫌いになる話が描かれていた。トラウマセンターでは、5・18で父を失った少年が成長し、「あの日、私は彼女とデートをしていた」という職員と共に、心に傷を負い苦しむ人のケアを行っていた。国立墓地の真ん中には、掌の中に入った民主主義を表す塔が建っていた。

光州の権力と戦う運動に対し、私たちは韓国で何を語るのか、議論を重ねてきた。そして、この間、大森直樹さん（学芸大学）の指摘から日韓合同授業研究会の中で話し合ってきた「道徳の教科化」の課題と、安藤さんの住んでいる地域の歴史である「成田闘争」を取り上げた。その中で浮かび上がったのは、「公共の福祉」という言葉のもっている問題であった。

この問題に対して、大森さんと一緒に取り組んでいる池田賢市さん（中央大学）が、わかりやすく話して下さった。欧米における「公共」のイメージは、個人の外側に公共の場があり、個人がそこに出かけて行って話し合ったり活動したりする。「公」と「私」は分離しているからきちんと「公」を相対化し、時には「公」は人権を奪うことがあることに気づき、国家権力が「私」の人権を奪うときには、「公」に対し批判することができる。そのような「市民」が形成される。一方で、日本における「公共」のイメージは、個人の同心円的な広がりの中に「公共」がある。「公」と「私」は分離していない。「私」は「公」の中に包み込まれている。「公」の一部としての「私」であるから、「私」は「公」のために存在する。そして、国家権力は「国民を守るもの」と認識されていく。

よく考えてみれば、これは、教育勅語そのものではないか。「父母ニ孝ニ 兄弟ニ友ニ 夫婦相和シ 朋友相信シ」の後に「恭儉己レヲ持シ」（自分の言動を慎みましょう）「博愛衆ニ及ホシ」（広く全ての人に慈愛の手を差し伸べましょう）と続き、このために個人の成長が求められる。「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」（勉学に励み職業を身につけましょう）「以テ智能ヲ啓發シ」（知識を養い才能を伸ばしましょう）「徳器ヲ成就シ」（人格の向上に努めましょう）。そして、「進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ」（広く世の人々や社会のためになる仕事に励みましょう）「常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ」（法律や規則を守り社会の秩序に従いましょう）と続き、最後は「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」（国に危機があったなら国のため力を尽くし、それにより永遠の皇国を支えましょう）と、命を捨てても永遠の皇国を支えることが、人生の目的であるとされる。

「公共の福祉」をやさしい言葉で「みんなの幸せ」と置き換えてみる。「みんなの幸せのために、がまんしなさい。」けれど、その「みんなの幸せ」とは、「だれの幸せ」なのか。「みんな」の中に「私」は入らないのか。「幸せ」かどうか決めるのは誰なのか。「みんなの幸せ」のために、フクシマの事故は忘れなければならないのか。今、故郷を奪われて傷んでいる人や、流れ出る放射能汚染水や、放置されている除染袋は見ないことにしなければならないのか。「みんなの幸せ」のために、沖縄に基地を置かなくてはならないのか。騒音や落下事故、犯罪、自然破壊、そしてアメリカと日本政府からの差別に耐えなければならないのか。「みんなの幸せ」のために、自衛隊は海外に戦争をしに行かなければならないのか。「みんなの幸せ」には、北朝鮮や中国の若者は含まれないのか。彼らは憎しみの対象でしかないのか。「幸せ」・「福祉」とは、「だれの幸せ」・「だれの福祉」なのか。

この夏、SEALDsの人たちのスピーチに、何度も励まされる思いがした。SEALDsの人たちは、政治を一人称で語る。一人ひとりが自分の言葉で語ることを大切にしている。9月19日未明、法案が可決した後の国会前での関西の女性のスピーチも心に残るものであった。

「私、引きこもってて。でも、今は私を支えてくれる女の子達がいる。でも、彼女達は、彼女

のうちの1人は、例えば、家に帰っても、ご飯が出ないんです。それは、お母さんがどこかへ行ってしまって、お父さんも仕事に夢中で、冷蔵庫に何もなくて、調理器具もなくて、その子も料理の作り方知らなくて、いつもお菓子ばかり食べてて、コンビニで売ってる最新のお菓子とかいつも教えてくれて。その子にこの間、首相の名前聞いたら『アベノタカシ』って言われました。これ、めっちゃ面白いけど、でも、私全然笑えなくて、そんな時。だって、首相の名前も知らなくて、安保法案の『あ』の字も知らなくて、国会で今どんだけやばい会議がされてるかってことも知らなくて。その子がただ明日何食べていくかとか、親に愛されたいとか、そんなこと思っている間に、その子に一番関係する法案が、こんな無茶苦茶な形で通ってて。私はそれ聞いて、笑えなくて、涙が止まらなくて…。」

彼女の周りにはこの時代の中で痛めつけられた若者がたくさんいる。彼女自身も、「布団の中でSEALDsを知った。」という。自分の立ち位置を次のように語る。「私にはぼんやりとやけど、昔からしたら考えられへんけど、30年後くらいに叶えたい夢があるんです。夢ができました。それはちっちゃな喫茶店をすることです。どこかの下町で、狭いお店がいいんです。近所の小学生が力作の絵を持ってきたら、ジュース無料であげちゃうようなお店です。長時間、勉強や読書をしていても居心地が悪くならないお店です。明日どうやったら生きていったらわからなくなった人が、なんとなく立ち寄るようなお店です。今日はちょっとお家に帰りたくないなと思っている女の子が、コーヒー1杯で粘れるお店です。自分はどこにも帰る場所がないと思った時に、ふと思い出すようなお店です。親子丼とコーヒーの美味しいお店です。」そこから政治を語る。「私は政治家になんかになりたくない。でも、国会で寝ている議員よりも、ずっと真剣に政治のことを考えている自信があります。それは、叶えたい夢と、生きて行きたい未来があるからです。毎日命を懸命に生きているからです。そして、そのささやかな夢や、生活や、命を守るのも、壊すのも、紛れもなく政治だからです。だから、この国の政治家のトップに、『国民の理解は関係ない』とか言われたら困るんです。だから、『立憲主義って何ですか?』とか、国会議員が言い出したら困るんです。私は、決してそれを政治家として主張したいんじゃない。その政治のプロの方々の、あまりにも軽々しい言葉が、一番影響を及ぼす、一番立場の弱いものとして、命を馬鹿にした勉強不足の政治家には『辞めていただきたい』、と言いたいんです。」与党が圧倒的な数の力で、話し合いのルールを蔑ろにしながらか、少数の意見に耳を貸さずに決めた「戦争法案」を可決された夜、語られた言葉である。

国家権力は、その力で歴史の中で何度も国民の人権を奪ってきた。しかし、その中で「民主主義」は力強く成長してきた。成田で、多くの農民が自分の土地を手放した。しかし、多様な立場の考えを正しく伝えようとする資料館が作られているという。光州では、5・18を未来にどのように伝えるかを考えている人々に出会うことができた。交流会の最終日に、いつもレセプションで楽しいパフォーマンスを見せてくれるコンアヨンさんが、自分は光州の出身であることを隠していたと明かした。光州の歴史は悲しく、逃げ出したい歴史だと考えていた。しかし、今回の交流会を通して、考えを変えたことを話してくれた。「明るい光州が私のとなりになります。私を慰めてくれる、暖かい光州があります。」と語った。

日本は、「海外にでかけて戦争ができる国」となった。しかし、今回初めてデモに参加したという様々な世代の人たちが現れた。8月30日には、12万人（実際にはもっと多かったと思われる）の人が国会前に集まり、日本全国でもたくさんのデモが行われた。

「民主主義って何だ。」「何だ。」というコールは、9月に入り、いつのまにか「民主主義って何だ。」「これだ!」と変わっていた。9月19日、デモに参加した人たちに悲壮感はなかった。みんなの心に「これからだ。」という思いが広がっていた。

第21回交流会 光州大会

*今回の交流会では、留学生が3名参加してくれました。3人の感想と交流会感想と、交流会アンケートの抜粋を掲載します。

一年間の留学生活と日韓合同授業研究会

酒井

母の勧めにより、留学直前の去年の夏、初めて交流会に参加させていただきました。その際、母が積極的に韓国側の方々に私が韓国へ留学に行くということを話してくれたおかげで、みなさん私を認識して下さり、気遣って下さいました。カカオのグループトークにも追加させてもらい、モイムにも何回か顔を出させていだきなど、興味深い体験をさせていただきました。週末は同好会の活動があるため、指で数えられるくらいしかモイムには参加できませんでしたが、1月には交流会の下見にも同行させていただきなど、一年間、韓国側の特別会員(?)としてご一緒させていただきました。特にチェギユスンさんとチョハンミさんには本当にお世話になりました。二人はいつも「ゆみさんの韓国の保護者だから」と言って、お部屋探しの際も助けて下さり、1月の下見の際にもソウルから車で光州まで連れて行って下さりもしました。

韓国側は、小学校の先生方などおしゃべりで明るい若手の方々がいる反面、おとなしい方も多く、とてもバランスの取れた会員構成になっていて、12月のモイム時には持ち寄りパーティーをやったり(みなさん美味しいもの作って持ってきて下さいました)、カカオのグループトークで自分の活動を紹介しあったり、非常に活動的な方が多いように感じました。残念ながら、日本ではモイムには一回しか参加してないので、日本側はどんな雰囲気なのかよくわかりませんが、韓国側のモイムはいつも笑いが絶えない楽しいものでした。

さて、今年も交流会に参加させていただいたのですが、語学堂の卒業論文作成に追われていたのに加え、母も参加できないため、行くのをためらっていましたが、韓国にいるのに行かない理由はないな、と思うようになり、「行こう!」という気持ちになりました。幸いなことに、交流会に興味を持ってくれる友達もいたので、とてもうれしい反面、誘ったのにあんまりおもしろくなかったらどうしよう…という不安もありました。自分は知っている方が多いけれども、友人の二人は全く初めてだったので、日韓双方の方々と交流が深められるか少し心配していたのですが、私たちに積極的に話しかけてくれる方が多く、2日目の夜・3日目のレセプションでも友人二人ともそれぞれ、普段聞けないようなお話など聞けたようで、ホッとしました。

個人的には、今年は知っている方も多く、韓国語も話せるということで去年とは一味違った充実した交流会になりました。留学中、韓国現代史の授業を受講していたので、光州事件に対する理解も深まりましたし、池田先生の興味深い授業報告も聞いてとても満足な内容でした。報告を聞く前、池田先生の原稿にさらっと目を通していたのですがどうも難しそうな内容だな、と思っていましたが、いざ聞いてみると、道德の教科化がなぜ問題となるのかをおもしろくかつ分かりやすく解説してく下さり、ぐっとひきつけられました。また世代間の権力に対するイメージの違い、日本人の社会構成に対する意識の低さ、特に若者の疑問を持たずにただ従う姿勢、といった

日本社会の問題点を道徳の教科化と併せてしっかり指摘してくださり、とても興味深い内容でした。今回の報告が、自分を振り返るきっかけにもなったので、池田先生にはとても感謝しています。自分が通う大学にはこんなに興味深い講義をしてくださる先生はほとんどいないので、非常に満足しています。

正直なところ、去年はじめて参加させていただいた時は、自分は周りの方々と年も全然違うし、なんだか自分が来るような交流会ではなさそうだな…と少し感じましたが、留学という経験により日韓双方の方々とも親しくなれたし、かつ日韓双方に対する関心もとても高まり、学びの多いすばらしい交流会だなと思うようになりました。そして、この日韓合同授業研究会は、会員のほとんどの皆さんが教師である点も、魅力の一つでもあります。互いの教育現場がどのようなのかを授業報告を通じて理解し合えるのはもちろんですが、学生の私からすれば視野が広がり、知識を増やす貴重な時間となります。韓国人の教師と触れ合う機会なんてほとんどないので、貴重な経験となりました。

しかし、このようなすばらしい活動があるにも関わらず、私と同世代の参加者がほとんどいないのは残念なことです。もちろん、「合同授業研究会」なのでメインは教師の集まりとなるとは思いますが、もう少しさまざまなバックグラウンドを持った方々が集まれるような交流会になればと思います。今回、二人しか知り合いの若者を誘うことができませんでしたが、これから先もっと若い世代も加わっていければな、と思います。来年は、就活のため行けるかわかりませんが、可能な限り継続して参加できたら…と思います。日韓の会員のみなさんを見てみると、一年ぶりの再会を喜び合ったり、プレゼントをあげあったり、とても見ていて心地が良いです。日本と韓国は、政治的にはぎくしゃくした関係ではありますが、このような交流がずっと続けられるように頑張りたいと思います。

崇高な精神

佐藤

今日私は崇高な精神に触れることができた。

光州事件がきっかけで 14 年間投獄され、人権運動をする傍ら、出獄後に医師免許を取得、当時の事件にトラウマを持つ人々治療に励む方のお話を聞く機会に恵まれた。

強靱な精神の人、自分の信念を曲げずに闘ってきた人は真っ直ぐに社会の理想を語る事ができる。それは権力に拘束された身体の経験が善と悪の観念を明確化させていったからだと思う。

私たち市民は
法律を作る、変えるという行為から日常生活で起きる利害
の不一致を解決することまで
どんな場面でさえ
[理想]をまず第一に言うてみる事が大切ではないだろうか。

自分の経験を踏まえていうと



Pa

大学生になって世間に放り出され、その世間のしくみを完全に知りきれてないことが怖くて、判断すること自体を放棄してきた気がする。

世の中には様々な立場の人がいて然るべきで、そのうち価値のない意見は一つもないはずなのに「価値判断すること」「善悪を判断すること」については、「教養が備わっていない自分の判断は間違いではないか」という葛藤が原因で、私は判断を保留した「中立」でいることに努めてきた。「中立」はその時の社会情勢に左右される両端の真ん中を取ることでしかなく、且つその態度が権力への無言の支持であるという事実を無視して。

そうではなくて、もっと簡単に誰もが自分が生きてきた人生を代表して自分の理想を素直に言えるようになりたいと思った。それこそが、様々な「生」の在り方を認めることだからだ。この一見当たり前のことが民主主義や個人の尊重などの観念に繋がることではないだろうか。

今日カンさんの話を聞いて、なぜ私が歴史社会学を学んでいるのかなぜ暗鬱とした歴史問題に関心を抱き続けているのかを再確認することができた。権力に対し声を挙げ闘うことは、人間であることを全身で表明するからこそ尊い。そして私たちはこのような人々の努力が、私たちの生の幅を広げてくれている事に気づき感謝しなければならない。私が関心を持つ全ての歴史問題の行き着く先は人権の問題である。もっと勉強して理解、把握したい。もっと近くでこういう人々の話を聞きたいと思っている。

日韓合同授業会に参加して

岡本

今回、こちらの会に参加させていただいて、自分の視野が広がったと感じました。光州事件に関して、僕は名前しか知りませんでした。しかし、記念墓地やガイドさんのお話を聞いて壮絶な事件であった事を知ることができました。つい30年前くらいに隣国でこのようなことがあったとは、少し信じられませんでした。特に昔の収容施設を回った時の展示してある人形にも驚きました。自分では民主主義の重要さをあまり理解していませんでしたが、この事件を知ったことによって民主主義の重要さを感じることができました。さらに、韓国の先生方が小学生や中学生に向けて授業を行った授業報告会で小学生向けの絵本がありました。その絵本は僕にとって衝撃的で深いメッセージを感じました。同じ国の市民同士ではありますが、この混乱の中で兵士たちをそうさせる何かがあったのかなとも思いました。トラウマセンターでは光州事件で心的外傷を受けた人たちのセラピーを行っているとのことでしたが、光州事件で兵士として出動した人たちの現状も気になりました。

授業報告会では道徳の教科化についての討論会が僕にとって興味深かったです。しかし、自分

は大学で教職の授業をとっておらず、知識も浅く、理解をするのが大変でもありました。池田先生がおっしゃられていた現在の若者の国家に対する考えには賛同しましたし、危機感を感じました。20歳になって選挙を身近に感じたときからは国家を少し疑うこともありました。その前までは池田先生のおっしゃられていた通り国家が私たちを守ってくれるものだと思っていました。この討論会の中で参加者の方々が意見や質問をおっしゃられていました。その意見、質問に僕は一つ一つ驚きや関心が生まれました。自分がどれだけ知らなかったのかを痛感した意見もありました。特に日本にずっと住んでおられる韓国人の選挙権について、僕は浅はかな考えをもっていました。お話を聞いて考えが変わりました。道徳に関しては、自分の中で何が良くて、何が悪いかを判断をする補助をしているとの認識がありましたがその認識も間違っているのかなと思いました。

最後に、今回、この会に参加したことによって自分の考え方が大きく変化しました。この変化や会で感じた新鮮な気持ちを大切に、これからの勉強に役立てたいと思います。

〈第21回 光州交流会 日本側アンケートより〉

1. 今度の交流会の日程で一番印象深かった行事は何ですか？（その理由はなんですか）

○光州公園で、光州事件の収容所を見たこと。私は、人権的視点から弾圧者と被害者は和解できるかを考え続けてきたが、とても難しいと思った。心の傷はなかなか癒やされない。

授業研究会、授業を通しての交流することの確かさと希望を持てた。ありがとうございます。

○5・18事件の真相を知ったこと。・・・1980年に何が起こり、そのことが韓国の民主化や現在に、どのようにつながっているか理解できた。

○フィールドワークの国立墓地訪問・・・運動の現実が個人個人の生き方と共に知ることができた。

○光州5・18、講演と墓参、トラウマセンター・・・亡くなった一人一人の姿と、生き残った人々の闘いを忘れずに生きてきた方々の生き様は心に残った。

池田先生の、具体的でわかりやすい「道徳教育」の話

○FW。5・18の意味を長い時間かけて考えて、また「残された人々」の「あの時、私は逃げた」ことを心の深い所に置きながら5・18を記憶しようとしている。

○フィールドワーク全般。韓国現代史を知る、いい機会になりました。

○全体討論 「民衆闘争」⇔「道徳教育」 議論がよくかみ合いました。

（偶然ではない・・・と思いました。）

○光州5・18トラウマセンターの所長さんの話を聞いたこと。人権を剥奪された本人の話聞いてこそ、人権の尊さを実感することができ、深く感動を受けた。

○光州のフィールドワーク・・・民主化のために闘った人々の事を詳しく知ることができ、「記憶」していくために、多くの人が今現在も頑張っていっていること。

○フィールドワークの中で、5・18民主国立墓地・望月洞旧墓地と光州トラウマセンター・・・墓地を案内して下さったKさんが墓の主一人一人について話され、その姿に思いを馳せることができました。

また、光州トラウマセンターのセンター長のお話、そして、穏やかに私達にセンター内を案内して下さったチーム長が父親の遺影を持っている写真の少年ということ。

○2日目のフィールドワークで、5・18の爪痕を巡ったこと。国立墓地の説明では、あの事件で奪われた様々な人生を思い、心が重くなった。五歳の子どもや、女学生に何の罪があったのだろうか。なんで人生を閉ざさなければならなかったのか。

初日の夜にチェジョンギ教授がお話しいただいたことも、考えさせられる。デートをして、映画館に入る時と出た時の光州の町の変わりようについて述べられた時に、あの事件で生き残った者、逃げた者がかかえる、心の重荷を考えずにいられなかった。このように多くの人の心に傷を負わせる国家の横暴の発露こそ、3日目にお話しいただいたH先生のおっしゃった国家の不道德の極みの事件ではなかろうか。このように考えた時にトラウマセンターでお話しいただいたセンター長が、自らの厳しい体験を踏まえて、苦しんでいる人々を救いたいと、努力されていることに心を打たれる。そして日本にもこの問題は現在もあることを再認識したい。

デモに参加する、「民主主義とは」「立憲主義とは」という真摯な問いをしている若者に、「自分勝手」としか考えない愚かな国会議員。このような者達が「公共」の名の下に「個」の意思を押しつぶそうとしている。現在の日本の国家の有り様は「銃」を持たないだけで、光州事件を起こした国家とどこがちがうのだろうか。池田先生の「公共」と「個」の関わりの問いかけは非常に深く現実そこに問題として考えさせられる。

○韓国現代史の生きた現場に来て、その体験を、本人から、今に続く生き方として、証言を聴くことができた。5・18を様々な立場から、会員、そしてフィールドワークの現場、授業報告を通して。それは、胸をえぐる、目を背けたい現実であると同時に、歴史に向きあい、生きてきた人々の姿。

国立墓地の一角で、多くの方々が、金大中を偲んでの活動に集まっていた。美味しいスイカをごちそうになった。

○フィールドワークで最初に訪れた国立墓地での献花式が一番印象に残っています。行進曲の物悲しいメロデーのせいかもしれませんが、なぜか涙が出て仕方ありませんでした。そこに葬られている人の境遇や生前の願い、遺族の思いなどをガイドの方の丁寧な説明を聞き、5・18で失われた命の重みを感じました。ガイドの方に質問してわかったことは、調査委員会がいまなお亡くなった人々の聞き取り調査などを続けているとのこと、亡くなった方々に対する敬意が伝わってきました。

○今回、とても印象深かった行事は中央大学の池田賢一先生がお話していた「特別の教科道徳の不可能性と危険性」です。お話の初めに若者たちの権力に対するイメージについて説明してくださいましたが、言われてみるとまさに自分も権力が私たちを守ってくれるものであると考えていました。さらに日本国憲法25条の池田先生の解釈にとっても驚き、自分の無関心さに絶望しました。私たちが国家を100%信頼してはいけないのではないかと言う疑問も生まれました。

○なんといっても池田先生の発表だと思います。通訳との打ち合わせ等、事前準備をかなりしっかりなさったとは聞いていましたが、とってもしっかりやすくかつ面白い発表でした。ぜひ先生の授業を聴講してみたいという気持ちも生まれるほどでした。

正直、先生の発表を聞く前は、道徳の教科がなぜこんなに問題視されているのか正直よくわかりありませんでしたが、講義を聞いてとても納得できました。道徳的判断力を身に着けるには、むしろ正解不正解関係なく、多様な意見を聞き、視野を広めていくのが必要なのでは？なぜ日本はこんな方向に走ってしまっているのか・・・と感じました。また、先生の発表を聞いて、留学前の自分は与えられたものをこなし、常に正解ばかり求めていたな、と自分を振り返るきっかけにもなり、意義深いものになった気がします。

○今回の交流会で一番印象深かったのは、先生方の授業報告でした。私の将来の夢も小学校の教師なので素晴らしい先生方の授業報告を聞きながらいっぱい学ぶことができました。また、成田

闘争は5・18に比べてよく分からなかったのに安藤先生の授業報告を聞いて色々と学ぶことができてとてもやりがいのあった時間でした。

2. 今度の交流会で一番楽しかったことは何ですか。

○楽しいというより、うれしいことは、毎回交流会でお会いする韓国の会員の皆さんの生き生きとした様子である。また、今回も若く意識の高い学生の皆さんが日韓両国から参加されていることもうれしい。そして私自身もこのような前途ある子ども達の教育に携わっているのだという、責任感も感じる。教師とはいかにあるべきか、という本質的な問題を交流会に来るといつも、考えさせられることが一番うれしい。

○バスの中などで韓国側会員と個人的にゆっくり、深い話ができたと。

○会員同士の出会い、話し合い。現場のもつ力。

○食事！うわさ通り、とてもおいしかったです。

○交流の宴会、理屈なく楽しかった。旧友に会って、お酒を飲むことがよかった。

○この日韓合同授業研究会交流会を「学びの共同体」だな、と実感したこと。老若男女、小6生から高校生、大学生、現役の小中高大の教員、研究者、活動家等、70半ばの退職者まで、共に学び、語り合うことができた。

○楽しかったのはレセプション。いつもながら韓国側の出し物にはびっくりです。アフターでコップ回し？を教えてもらったのですが、最初はまねて、すぐに慣れ、いつの間にか夢中になってしまいました。

○今回の交流会の下見にも同行していたため、個人的には、下見で行かなかった楊林洞近代歴史文化村のフィールドワークと、三日目の授業報告が一番興味深い内容でした。ガイドさんが丁寧に説明してくれたため、とっても有意義なフィールドワークになりました。直接的には授業報告内容とは関係はないですが、韓国では教師と保護者がグループトークを積極的に活用している点が韓国社会を反映しているものであり、とても新鮮でした。一年ぶりに日本側の参加者の方々と交わったのがよかった。

○光州事件と言うものは名前しか知らなかったもので、その事件について詳しく知ることができ、ゆかりのある土地に行けたことがとても良かったです。本やインターネットでも知ることはできると思いますが、直接、見聞きしたことによって感じられたことも多くありました。

夜の参加者の方々と交流会も楽しかったです。普段、あまり話せないような方々と自分の気になっている話をする事や聞くことができ視野が広がった気がします。

○一番楽しかったのは、夕食を食べてから部屋で先生方と夜遅くまで話したことです。まだ高校生なのでこういう場に参加する事が、なかったのも色々な私の悩みも聞いて下さってとてもうれしかったです。また、日本に住んでいるのにも関わらず東京韓国学校という柵に囲まれて日本人と長く話す機会がなかったのに今回それができて胸がいっぱいでした。

3. 今度の交流会に対するご感想をお書き下さい。

○楽しさを支えた、綿密な準備（2度の実踏、報告書の事前の配布、翻訳）、現地の方々の熱意、食事や時間の配分、その時々適切な内容指示でスムーズに交流ができたこと。

献身的で、深い愛情に満ちた会員の働きに感謝の気持ちは大きい。



○今回の授業報告3本は、光州での交流会を意識しての選定だったと思いますが、3本とも全く異なる授業の進め方で興味深かった。教師が一方的に説明するのではなく、子ども達が考え、発言し、活動する場を多く工夫されていたと思います。それ以上に、このような題材が授業に取り上げられたことの意味は大きいと思います。

重大なテーマの講演が多く、私は聞くだけで精一杯。光州5・18に関するものが2つと道徳教育に関するもの2つがあったが、道徳教育についてもっと討論する時間がほしかった。道徳教育の陥りやすい危険性とか、今後のあり方などについて意見を聞きたかった。

○韓国社会の様子が、授業実践と討論を通して理解でき、日本の状況を、改めて考えることができた。

○内容 “国家のために生きる”と、つい思ってしまう日本人が多い中で（ほとんど空気になっていますね）、対照的に韓国では、国家が国家暴力を認めて、国家が自己批判して、市民が学べる場があることに驚くばかりだ。

○韓国の先生方の授業の水準が高い（高くなった）ことに、驚きと感動を覚えました。

「教師が教える授業」→「生徒が学ぶ授業」

公共の福祉と個人の権利について、深く話し合えなかったのが残念だった。

○光州での交流会の準備のために2度も下見に行かれたとのことでしたが、とてもよく準備されていると感じました。フィールドワークは、ひどい暑さのため、予定されていたところを全て回ることができなかったのは残念でしたね。

○執行陣のきめ細かな計画とそれを遂行する強い意志。おかげで無駄な時間がなく、充実した時間が持てた。

- ・韓国側の豊富な人材、羨ましいほど。
- ・優秀な通訳が3人もいて適切に、わかりやすく通訳していただけたこと。
- ・授業報告については、話し合う時間が少なかったと思う。
- ・宿舎は広く、会議室・食堂などコンパクトにまとまっていて非常に楽に過ごせた。
- ・韓国側で新しい参加者があり、日本側でも学生さん達の参加があって嬉しかった。あの方たちが今後も参加してくれますように。

○昨年、今年の交流会が光州と聞いて、交流会もここまで来たなと思いました。そして今回交流会で日本側の提示した「道徳」の教科化の問いかけと「光州事件」の、一見すると何の脈絡もないように見える2つの事象が、「国家」と「個」の関わりから深い繋がりを持っていることを知ることができた。国家による暴力については、道徳も同じであること。人間の精神的な自由を奪うことを強要することには、断固抵抗すべきであることを、光州事件の顛末も教えていると思う。その上で「終わりなき歴史」のテーマの通り、過去の歴史を忘れるのではなく、語り継ぐことの重要性を再認識させられた。語り継ぐのは、ほかでもない私達である。この成果を来年にどのように生かしていくのか、ボールは韓国側から私達に投げられた。少し荷が重い、この答えに少しでもなるように、これから1年私たちは活動したい思いを持って、この交流会を終えることができた。

そしてあらためて韓国側の皆さんの交流会の運営の鮮やかさに目を見張る。ほんとうにありがとうございました。

○ますます、交流会の内容が実った形になっていくのが目に見えてくるのが大変嬉しかったのですが、その代わりにどなたかが反省会で述べたように、発足当時の意味とは違って（違って良いとは思いますが）歴史にフォーカスが当てられるようになったのを、もう一度メンバーらが考えてみるべきだと思いました。

○自分は大学で教育を専攻しているわけではないので、当初は自分が場違いな所にいるのではな

いかと言う疑問がありました。しかし、参加者の方々のお話や講演会の質問も聞いて考えがかわりました。この交流会に参加しなければ先ほども書いたように自分の視野が狭いまま韓国の留学生生活を終えるところでした。

○去年の交流会では、初めてだったし、自分の意思で参加したわけではなかったので、あまり授業報告を一生懸命聞くことができなかつた気がしますが、今回は興味深い発表もあり、とても充実したものになりました。今回は留学中での参加だったので、韓国のことをもっと知りたいという気持ちと、日本人として日本のことをもっと知っていなきゃという二つの気持ちがあり、より意欲的に取り組めたのでは、と思います。

○チェ先生のおすすめで参加することになったんですけど、期待した以上にとっても楽しい時間でした。フィールドワークに参加できなくてとても惜しかったので次回また参加したいです。

4. 次期の交流会に望む点は何ですか？

○どんな集まりでも会員が多い地域を中心に活動するでしょうけれど、関東以外の地域のメンバーもご一緒できる企画があれば、もっと良いのではと思います。

○来年は茨城で開催される。この地域に埋もれた歴史を掘り起こしながら、あわせて今年のテーマを引き継ぎ、発展させるように努力してゆきたい。

○原点に帰って、それぞれの会員はなぜこの研究会・交流会に参加しているのか、たがいに自分の気持ちを話し合う時間が持てたらと思う。

○次回は茨城県が会場になると思いますが、今年のテーマ「終わりにき歴史、光州と向き合う教育」を発展させることができればと思っています。

○日韓共に、子どもたちの人権、教師たちの人権を実現するための授業作り。保護者たちの参加があるといいです。

○若い人々も増えたらいいと思います。また、20年間の会の流れ、歩みを知りたいです。

○「テーマの設定」の連続性

○全体会の仕切りには入念な準備をして、時間が押すことなく充実した話し合いができればと思います。

○人権教育の発展につながるテーマで、引き継いでやっていってほしいと思います。

○フィールドワークの充実、工夫。

○平和と人権にかかわる課題を共に考える時としたいです。

○今回はじめてですので、とにかく続けて参加したいと思います。

○今回のテーマを続けていっていききたい。特に、道徳の問題点、公共とは何か、さらに深めていききたい。共に生きる、共生とは何か、考えていききたい。

○報告、講演の数を厳選して、ひとつのテーマについてじっくり多くの意見を聞いたり、発言できる時間的ゆとりがほしいと思います。いったい今、子ども達に何が必要なのでしょう？来年の8月までに考えをまとめておこうと思います。

○東京近郊の農村地帯の歴史と現在を、現地の証言から、現地に立って学ぶ。人間と日本の歴史を、現在から見つめ、共に今後を考える機会にしたい。

○今回初めて参加させていただいたので不満な点はありません。

○日本側のメンバーには、学生さんが少ないのが残念でした。それで、できたら次回の参加までには、前回学校で参加した交流会で会った、韓国に関心のある日本の学生たちに声を掛けたいと思いました。

5, その他

○この交流会の体験で得たものを、しっかり受けとめたい。ハンゲルの学習の意欲につなげたい。韓国の方々の温かく積極的な生き方に心動かされる。合理的で、美味しい食事のシステムも感心した。

日本では、戦後70年、というけれど、米ソを中心とする「冷戦」という戦争が続いていた。韓国は、その最前線。その軍事政権下で5・18抗争は起きた。人間の尊厳をかけて、民主化を進めて来た。70年の間、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争、イラク戦争等があった。「テロとの戦い」が始まり、軍事力強化の口実になっている。一強・アメリカの同盟国の日本の安倍政権はその片棒担ぎに躍起となっている。戦争のリアルと共に、「冷戦」の構造（経済や思想）を知る必要を感じている。

○いつも感じるのが、準備するのが本当にご苦労さまでした。

○韓国のみなさんの行き届いたご配慮に感謝いたします。

○フィールドワーク、良かったのですが、内容が盛りだくさん過ぎて、消化不良でした。「光州5・18」のことにのみ絞っても良かったのではないかと思います。

○韓国側の周到で献身的な交流会準備に感謝したい。

○このような交流会に参加することができて本当に良かったです。本当にありがとうございました。

(記録 川辺)



みんな大切なわたしたちの子どもです。

安山（アンサン）元谷（ウォンゴク）初等学校 ソン

わたしは安山で、多文化家庭の子どもたちのための特別学級の担任をしています。以前は外国人勤労者の子どもたちの特別学級の担任でした。これまで10年間、26カ国の文化を持つ生徒たちを教えてきました。韓国語は一言もできず、韓国文化をまったく知らない200人あまりの国際

結婚家庭の子どもたち、外国人勤労者家庭の子どもたちを教えました。北韓離脱住民の子どももいました。

多文化家庭中途入国生徒たちを教えるたびに、ことばでは言い表せない困難も多かったです。投げ出してしまいたいときもしばしばありました。韓国語がまったくできないので、絵を描いたり身ぶり手ぶりで話したりもし、表現の仕方が互いに異なる文化のために誤解して、顔を赤らめて言い争いをしたこともありました。先生と生徒の間の簡単な意思疎通もできないたびに、しかしわたしたちはあきらめませんでした。たがいに適応しようという努力を通じて、いまは宝石のように輝く師と弟子になりました。韓国の学校に初めて来た日、こぶしをぎゅっと握って背中に隠していた子どもたちが、もう高校生になり大学生になりました。いまはほかの人たちと一緒に生きていこうとするけなげな子どもたちに育ちました。

わたしが教えている多文化家庭の子どもたちは成長過程で深刻な悩みにぶつかってハラハラする瞬間がたびたびありました。母親がインドネシア人のユシニは、友だちがユシニの褐色の肌をからかうので、「白い肌をください」とクリスマスのお願いに書きました。ひときわ肌が黒いコンゴから来たプロンカは、黒いという理由でバスを待っていた停留所で中学生たちに殴られたりしました。

子どもたちの暮らしの中で時々ひどいことが起こります。モンゴルから来たエデンは、体育がとてもよくできる生徒でした。エデンはドッジボールの試合になると、ふだん仲よくしていた韓国の友だちが「おまえの国に帰れ！」と叫びたてるためによく泣きました。ジョンウォニは何か言うたびに飛び出す北韓なまりのせいで、友だちに北韓から来たことがわかって嫌がられるのではないかと、教室で貝のように口を閉じて不安な日々を送った時期もありました。



多文化家庭中途入国の子どもたちはとても熱心に韓国語を勉強しますが、中間考査・期末考査のたびに戻ってくる成績のせいで、自尊心をまったく失いがちです。母国では勉強もかなりよくできた子どもたちです。数学ができ、美術や体育がずば抜けてよくでき、中国語・モンゴル語・英語・アラビア語もよくできます。けれども韓国語がわからないので成績が悪く、友だちがまるで頭が悪いかのように言うので、とても腹が立ったそうです。中国の韓族であるヒョビニは、どの教科も韓国語で問題が出るために成績が低いので、韓国の友だちが「君は中国語ができるんだから大丈夫だよ！」と励ましてくれたらいいのと言います。

長所を知ってやればだれでも熱心に勉強したくなり、上手にやりたくなるものです。時々わたしは教師としての自分の態度について考えます。「自分もまた多文化家庭の子たちをダメな子たちだと思っているのではないか？わたしは子どもたちの長所をきちんと知っているか？」と。

韓国の子どもたちも今日突然船に乗ったり飛行機に乗ったりしてほかの国に行ったら、多文化的な生徒 (Multi-culture student) になります。ひとこともスペイン語ができないわたしが明日いきなりスペイン語だけで勉強し、過ごす学校に行かなければならないとしたら、ものすごく心配で今夜わたしは寝られないだろうということです。ウズベキスタンで学校に行っていて突然韓国に来たサーシャの話です。数日前にウズベキスタンの学校で友だちと別れ、今朝韓国の学校に来ました。目の前が真っ暗だった韓国の学校での初日は忘れられない悪夢のようだったそうです。6か月過ぎたいま、サーシャは韓国の友だちと一緒に駆け回ってサッカーをしています。イスラム教徒のジャイナブは豚肉が食べられないために昼食時間のたびに困っていました。とこ

ろが、運動会の日にキムパプ（海苔巻）に入っているハムをぐっと引き抜いてくれる韓国の友だちがいるので、学校に行くのが嬉しくなったと口癖のように言っています。

易地思之（相手の身になって思うこと）、互いの立場を変えて考えてみると、わたしたちは互いをもっとよく理解することができます。わたしたちはどうすれば大韓民国でともに成長することができるか、わかります。ともに成長するみんなが幸せな大韓民国であればほんとにいいでしょう。

講演をしに行くと「うちの学校には多文化家庭の子どもはたった二人しかいないので、とくに問題はありせん」という先生がいらっしやいます。また「わたしたちの地域では多文化家庭の子どもは1パーセントにもならないので、深刻ではなく気にする必要はありません」という地域の人びとも多いです。

わたしは結婚が遅かったために遅くなってから生まれた大事な息子が一人います。子どもを育ててみると、先生たちや父母たち、みなさんご存知のとおり、子どもが育っていく中で家庭に与えてくれる喜びや幸せはことばでは言い表せないものですよね。そのようにかわいくて大切な一人一人の子どもたちが学校では、わずかひとり、たった数パーセントだからたいした問題ではないということばを聞くたびに、胸がどきっとします。学校ではたったひとり、たった1パーセントの多文化家庭の子どもかも知れません。けれどもその子が社会の偏見のためにちゃんと成長できないほど傷つき心を病むとしたら、その家はどうなるでしょうか？その家庭の不幸指数は100パーセントになるでしょうに。子どもたちを何パーセントという言い方で軽く扱うことはできません。子どもたちはひとりひとりが完全な100パーセントです。

わたしたちが集まって話すとき、冗談でやり取りすることばがあります。いくら忠誠心が強くかわいくても、うちで飼ってはいけない二種類の犬（キョン）がいると。どんな犬でしょうか？答えは先入見（観）と偏見です。軽い冗談だと聞き流すこともできます。けれどもわたしたちの子どもが幼年期と青少年期に「自分とちょっと違う人びとと違う文化」について先入観と偏見を持つことなく成長できるように助けることはわたしたちのもっとも重要な役割だと思います。

（訳注：韓国語で犬はケ、あるいはキョンという。先入観（韓国語では先入見）と偏見の見の発音はキョンなので、二つのキョンを犬にたとえている。）

ときどき聞かれます。わたしが教えている生徒たちは、多文化家庭の子どもなので一般家庭の子どもたちよりも問題が多くないですかと。多文化家庭の子どもたちは韓国の一般家庭とは違う文化を持つ父母がいるので、ちょっと違った種類の困難があることはあります。けれども多文化家庭の子どもたちがとくに問題が多いということはありません。多文化家庭の子どもたちも一般家庭の子どもたちが青少年期に見せる特性、まったく同じ成長の痛みに打ち勝って育って行っています。

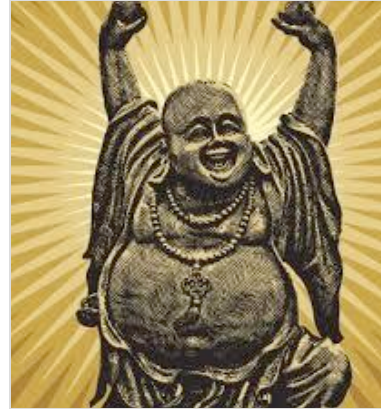
子どもたちの成長を見守りながら、あらためてわたしは悟ります。学校に来る子どもたちがこの国の人かということは重要ではありません。わたしたちが教師だからです。ほかならぬ、わたしたちの生徒だからです。

子どもたちはみな同じです。子どもたちは1年に12回以上も千変万化する姿を見せたりもし、愛されれば愛されるほど素敵に育つのがわたしたちの子どもたちです。疾風怒濤の時期にも愛を持って見守り、待ってやる知恵はすべての子どもたちにとって妙薬です。異なった目で見ようとせず、多文化家庭の子どもたちと一般家庭の子どもたちを等しい目で見てくださいることをお願いしたいです。みんなわたしたちの子どもです。先入観と偏見のない目でわたしたちの子どもを抱いてください。そうすればわたしたちの子どもはみな明るく健康に育って大韓民国の大切な構成員、地域社会に献身する世界市民になるだろうと固く信じています。

（訳：波多野）

神様のひとりごと ～天上から愛を込めて～

わしは神様。「この世」が誕生して以来、空のかなたから人間どもをはじめとした生物の営みを見守っておる。右の図はわしのご真影。なに？頭の上に輪っかがないだと？あれは人間どもの思い描くイメージに過ぎぬ。生身の神様はもっと人間臭いのじゃ。よって時には間違いを犯すこともあるのじゃが。



神様ご真影

何しろこの100年あまりで地球上の人間は7倍にも膨れ上がった。いくら神様とはいえ、とても隅々までは目が届かぬ。ちと目を離れた隙に勝手なマネをしでかす輩が多くて、正直困っておるところじゃ。

愚痴を言いながらも毎日下界を見下ろしているわしじゃが、ちと気になる者どもがおるのじゃ。なに、理由は特にない。その中の1人のヨシモトという男が、わしに似ていたのじゃよ。何がって？腹に決まっておる。そんな事情で、とにかくそやつらのことは、20年前から気にかけておるのじゃ。

そう、あれはまさしく20年前の夏じゃった。まだまだギクシャクしていた日本と韓国で、国際交流を試みたおかしな者ども。交流会直前になりながら会が開けるかどうか分からないという状況で、無謀にもソウルに渡った者たち。何のノウハウも持ち合わせず、行き当たりばったり、勝手知らぬソウルの街で右往左往、危なっかしくて見てられなかったのじゃ、正直なところ。まあ「とりあえずやってみよっか」くらいのノリで始めたのじゃろう。

言葉の通じぬ者同士、恐る恐るの出会い。特に韓国側では、教員が日本人と交流することに冷たい視線が集まった時代じゃった。今思えばウソのような話じゃ。なので、話がかみ合わないことおびたしい。お互いへの信頼が築かれぬまま、手探りで始めたのだから当然といえば当然ではあるのじゃが。

翌年は確か東京に両国の者どもが集まったはずじゃ。歴史認識の話で大いに盛り上がった、というよりケンカ越しの対話が続いたように記憶しておる。

それから毎年、場所を変えながら出会いは続いた。日本では福岡、沖縄、奈良、韓国では密陽、済州島…今年も確か光州じゃったな。それぞれにいろんな思い出がつまっているが、それらの話はわしも知っておる。いやなに、20年の間には「この世」から天上界に住みかを移した者もおるのでな。そやつらから時々話を聞いておるのじゃ。

それによると最近では両国の者ども、ずいぶん物分かりがよくなって、意見が激しくぶつかることはないそうじゃ。お互いへの理解が深まるほどに、相手を思いやり過激な発言を控えるということかの。わしとしては口角泡を飛ばす激烈なバトルもたまには見たいのじゃが。

ともかく気がつけば20年。交流を始めた当初は、これほど長く続くとは誰も想像していなかったようじゃが、よくも続いたり、じゃ。聞けば長年にわたる活動が評価され、韓国で大統領表彰を受けた者もいるらしいが、まさしく継続は力なり、「虚仮の一念岩をも通す」といったところかの。

この数年来、日本と韓国は政治家同士がいがみ合ってまたもやギクシャクしているようじゃ。そういえば過去にも歴史問題や領土問題を巡って両国関係が悪くなり、当時韓国側では交流会の中止も考えたらしいが、最近そんな話はほとんど出てこぬ。それだけお互いの信頼関係が固まったということじゃろうが、さて将来この交流がどうなるか。愚かな人間どものやることは神様にも予測はつかぬが、末永く出会いを続け、豊かな感性と幅広い視野を持った子どもたちを世に送り出してほしいと願うばかりじゃ。「嫌韓」が幅を利かせている今だからこそ、おぬしたちの役割は大きいと認識すべし。

だがしかし！それには大きな問題がある。日本側の者どもを見ていると、20年前とあまり変わり映えがしないではないか。天上界も今や過密状態で、おぬしらを受け入れる余裕はあまりない。なのでまだまだ頑張ってもらわぬと困るのだが、若い者ども来ぬ限りこの会の未来はないぞよ。

いや、何もこれまで尽力してきた熟兄熟姉諸君を無視する気はない。ただその…いつもと同じ顔ぶれではわしも見飽きるし、若者どもが活躍する姿を見たいのじゃ。とにかく若くて活きのいい、ピチピチした人材が必要じゃ。若者のリクルートこそ、会の存続を支える柱だと心得よ。分かっていると思うが、これはおぬしらを見込んでの愛のムチじゃ。キナ臭いにおいがそこここに立ち込める昨今だからこそ、平和・人権教育を続けることが何より大切なのじゃ。わしも天上界から念を送るゆえ、おぬしらも一層奮闘せよ。神様は見守っておるぞよ。(M)

短信

○「ウリ」は100号となりました。戦後50年をソウルで迎えた私たちの21年を思い起こしながら、しかし、これからを考えざるを得ないこのときに、光州に行けたことは大きな意味があったと思います。来年は茨城で行う予定です。今回行けなかった方も、ぜひ来年はご一緒しましょう。

○SEALDsの学生に、「言うこと聞かせる番だ、国民が」の「国民」について聞きました。彼は「国民」は「people」と訳される、つまり、「市民」だと答えました。日本にいるすべての人々の思いが伝えられる国であってほしいものです。(F)

ウリ 100号 2015年10月4日

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先

E-maillarrabee1991@yahoo.co.jp

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530